

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

千葉大学大学院 医学研究院 臓器制御外科での研修を終えて

富山大学学術研究部医学系消化器・腫瘍・総合外科

長森 正和

このたび、2025年度臨床外科学会の国内外科研修制度により、2026年2月2日から2月27日までの4週間、千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科（肝胆膵外科）で研修をさせていただきました。このような大変貴重な機会をいただき、日本臨床外科学会の万代恭嗣前会長ならびに国内外科研修委員会の高山忠利前委員長に深く御礼申し上げます。また、研修を快く引き受けてくださった大塚将之教授をはじめとした千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科の医局員の皆様に、心より感謝申し上げます。

私は初期研修終了後に富山大学消化器・腫瘍・総合外科に入局し、修練を積んできました。当教室も肝胆膵診療が盛んですが、経験を積んでいく中で自分たちのやり方は本当にベストなのかと考えるようになり、他施設ではどのような診療が行われているのかを勉強したいという思いから、今回の国内外科研修を希望いたしました。

千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科では肝門部胆管癌をはじめとした高難度肝胆膵手術が多く行われており、また学会活動や臨床研究も活発に取り組んでおられ、手術や周術期管理、日々の診療がどのように行われているかを実際に見てみたいと思い、今回の研修施設として選択させていただきました。

手術は月・火・木曜日に行われ、研修期間中には肝門部領域胆管癌に対する肝右葉・尾状葉切除+肝外胆管切除や膵頭十二指腸切除術の助手、腹腔鏡下肝切除やロボット支援下膵十二指腸切除術・膵体尾部切除術の見学をさせていただきました。高難度の肝胆膵手術や低侵襲手術を間近で見ることができ、また、これまで自分が学んできた手順や手技と似ている部分もあれば、異なるやり方・考え方もあり、手術のたびに学びがあり非常に充実した研修となりました。月・水・金曜日には肝門部領域胆管癌症例の術前回転胆管造影検査や門脈塞栓術・門脈ステント留置といったカテーテル治療も肝胆膵外科の先生方が行われており、手技の幅広さに感銘をうけました。また、病理診断も病理学の先生とも協力し外科の先生が行っておられ、実際に切り出しも見学させていただき貴重な経験となりました。

病棟診療は2チームに分かれて行われています。各チーム、大学院生を含めて7名ほどで構成されています。術前の症例については、全体のカンファレンスに提示する前にチーム内で一度検討会を行います。そこでは大学院生が中心となり、腫瘍の位置・診断だけでなく、現病歴、既往症・併存症、内服といった患者背景や生理機能、血管や胆管走行の細部までチェックが行われ、入念な術前プランニングが行われていました。私もチームに加わり日々の診療を一緒にさせていただきましたが、年代の近い大学院生の先生方が臨床をこなしつつ研究活動も行っている姿を拝見し、非常に身の引き締まる思いでした。

千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科では、自科でのカンファレンス以外に内科や放射線科との共同カンファレンスも行われており、診断や読影についての見識が広がる有意義なものでした。また、週に1回、ビデオカンファレンスも行われており、発表者の手術に関して良かった点だけでなく、うまくいかなかった場面では次はどうすべきか、といったことも活発に議論されており、大変感銘をうけました。

4週間という短い期間ではありましたが、今回の研修を通して様々な手術や検査・処置を経験させていただいたこと、自施設とは異なる考え方・視点を学べたことは、私にとって今後大切な財産になると感じました。

また、医局員の皆様には日々の診療でも気さくに声をかけていただき、夕食をご一緒させていただい

たり、お忙しい中歓迎会や送別会を催していただき、こうして交流を深めることができたことは一生の思い出になると思います。研修でお世話になった千葉大学の皆様に今後成長した姿をお見せできるよう、この研修で学んだことを活かし、より一層研鑽に努めてまいります。

最後になりますが、本研修に私をご推薦いただいた当教室の藤井 努教授をはじめ、私が不在の中、業務を支えてくださいました医局員の皆様に心より感謝申し上げます。

